

教師の希望 教育の困難を超えて

学力向上や到達目標、ゼロ・トレランスなど「子どもをしつかりさせ、はみださせない」「グローバル社会で生き抜くためには、もつと学力を高めなくては」などという強迫的な言辞のもとで「教育の非人間化」政策が進められている。教師に対してもスキル・アップと称する研修が行われ、人事考課が職場の人間関係を悪化させ、教育実践を硬直化させる要因ともなっている。若い教師たちへの「指導」と称する「いじめ」や年配教師への「使えない」という類いの言葉の暴力も、教師としての誇りと人間としての生きがいを剥奪する力となって学校を覆っている。

しかし断言してもよいが、ほとんどの教師は子どもたちに学ぶ楽しさを伝え、子どもたちとともに人間として成長していきたいと願って教師になったはずである。だからこそ、教師一人ひとりが学校の現実についての疑問を持ち続けることの大切さを確認しておきたい。

実際に、「本当にこれでいいのか」「もつと温かみのある実践をした」という教師たちの「つぶやき」はあちろちらに生まれている。それに耳を傾け困難をともに考え、支えようとする人々もまた確実に増えている。かつては教師批判一色だったメディアの論調も、教師たちの置かれている現実を見つめる方向へと変化してきた。

今はまだ「つぶやき」かもしれないが、それを「人間としての教師の声」にし、教育実践を語り合う術を交流していくことこそ、危機に瀕する日本の教育をたてなおす希望となる。そう信じて特集を編んだ。